



環境研究総合推進費
Environment Research and Technology Development Fund

良い申請書を書くためには —「どう書くか」ではなく「どう構想するか」—



独立行政法人 環境再生保全機構
Environmental Restoration and Conservation Agency

環境研究総合推進費 プログラムオフィサー

研究者独自の「シーズ（技術）」からではなく、社会の「ニーズ（環境問題）」から逆算する

× 従来型の考え方 （シーズ出発型）

● 自分の専門、シーズ技術から出発する

「自分はこの優れた技術を持っている。これを使って何が研究できるだろうか？」

○ 推進費の考え方 （ニーズ逆算型）

● 社会課題、行政ニーズから逆算する

「社会は今、どんな環境問題に困っているか？行政は政策遂行のために何を必要としているか？その課題解決のために、自分の研究はどう役立つか？」

**「政策貢献 = 単なるガイドライン・提言策定」ではない。
多様な貢献のカタチがあります。**

▶ 意思決定（政策判断）を支える科学的知見こそが推進費の求める最大の成果です。

▶ 多様な行政上の科学的必要性 に合致する提案を重視：

- ・ 時の問題物質に対する「新しい分析・測定法」の開発
- ・ 実態を正確に把握するための「環境影響評価・リスク評価」の実施
- ・ 数十年後を見通した対策のための「将来予測モデル・シミュレーション」の構築

▶ 誰の、どのような意思決定を科学的に支援するのか？ を申請書で明確にすること

審査の「有効性」評価を分ける核心であり、実務的には「e-Rad転記時の命綱」となる整理

研究の「目的」 (アウター・社会)

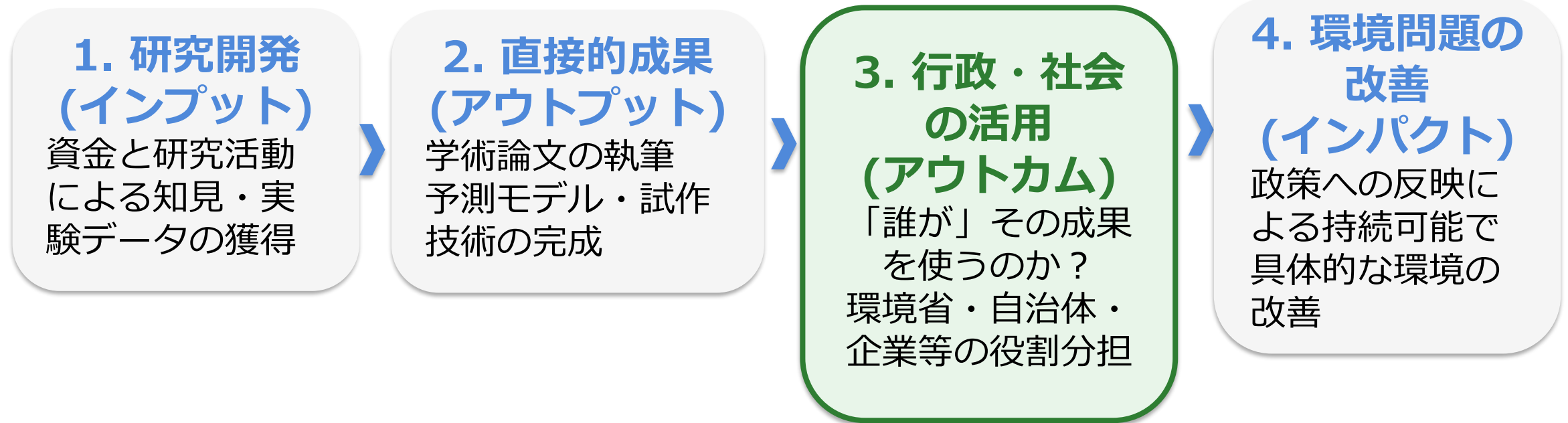
- 解決したい環境問題、社会への貢献
- ✕ 「〇〇分析手法を開発する」
- 「〇〇手法を用いて実態を把握し、対策基準の検討に貢献する」

研究の「目標」 (インナー・研究)

- 研究期間内に達成する測定可能な成果
- ✕ 「〇〇について調査し、検討する」(行動)
- 「要因を解明し、検出率〇%の技術を確立する」

 **実務的アドバイス：申請書の「概要・目的・目標」は e-Rad個別タブへの厳密な転記が必須！**
締め切り直前にシステム入力で慌てないために、あらかじめ明確に書き分け、文字数を整理しておきましょう。

成果を「論文執筆（アウトプット）」で終わらせず、その「一歩先」の社会活用を具体的に想像する



💡 最も重要なのは「3. アウトカム」のリアリティです。
その成果は「環境省の担当官が参照するのか？」「自治体職員が地域の計画に組むのか？」
「民間企業が実装するのか？」
活用を担う具体的な主体と役割分担を想定して、研究構想に組み込んでください。

計画とは「やることの一覧表（メニュー）」ではない。
一気通貫した「問題解決のシナリオ」である。

▶ 焦点を鮮明に絞る

総花的な「あれもこれもやります」という何でも屋のリストは、新規性や一貫性を薄め、不採択の要因になりがちです。

▶ 一本のブレない論理の線

以下のすべての要素が、一本の強固な矢印でつながっている必要があります：

- ① 社会的・行政的背景となる具体的な課題
- ② その課題を解決するための研究の「目的」
- ③ 期間内に実現可能な具体的・数值的「目標」
- ④ 目標を達成するための合理的な「研究計画・体制」

採択される物語のシナリオ

「なぜこの問題に取り組むのか」



「研究期間中に何を解明・達成するのか」



「どのような体制と計画で実証するのか」



「それによって環境政策がどう変わるの」

一気通貫したストーリーが、審査員に明確な納得感を与えます。

体制図は「著名な研究者の寄せ集め」ではない。目的達成に必要な「機能のパズル」である。

✕ 良くない体制（名前並列型）

- 著名な教授を並べること自体が目的化している
- 各サブテーマの「名前（肩書）」重視の編成
- 審査員の懸念：「代表者の強いリーダーシップは見え、予算分配のための形だけの寄せ集めではないか？」
- 結果、サブテーマごとの連携が見えない並列に。

○ 採択される体制（機能・逆算型）

- 課題解決に必要な「機能」から逆算する
- 「なぜこの研究者がチームに必要なのか、どのような不可欠な役割を果たすのか」を論理的に説明できる設計
- 位置付けが不明確なサブテーマを徹底排除
 - 💡 審査の「効率性（体制や計画の妥当性）」に直結します！

公募区分の違いは「予算規模」の違いではない。研究が果たすべき「役割のフェーズ」の違い

新しい可能性 (萌芽段階)

【革新型研究開発
(若手枠)】

環境問題解決の「新しい入口」を示す独創性

発展・拡張 (基礎・概念実証)

【環境問題対応型研究
(MF枠)】

予算 2,000万/年

多様な分野の参画、概念を実証し視野を広げる

課題解決 (応用・プロトタイプ)

【環境問題対応型研究
(一般課題)】

予算 4,000万/年

サブテーマを束ね、統合的に問題を解決する

社会実装 (フィールド実証)

【環境問題対応型研究
(技術実証型)】

予算 4,000万/年

実際の社会・現場で使われる「橋を架ける」

「尖ったサイエンスとしての面白さ」と「3年で成果が出るリアリティ」

▶ 新規性・独創性・革新性

環境施策に新しい展開をもたらすための「環境問題解決の新しい入口」を探す、チャレンジングなアイデアを期待。

▶ ハイリスク・ハイリターンであって も説得力のある提案

ただ奇抜なだけでなく、3年の研究期間・予算で「何らかの成果が出る」というサイエンスとしての納得感（リアリティ）を示すこと。

⚠ 令和7年度公募以降

- 第二次ヒアリング審査が廃止され、書面審査（第一次審査）のみで判断されます。
- 申請書の記入目安文字数を減らしています。
➡ 例：研究概要は「400文字以内」など。
- 💡 短い文字数の中で、審査員に「面白そう（独創性）」と「やれそう（実現可能性）」を同時に伝え切る凝縮された表現力が必須です！

「個々の優れた研究」の並列ではない。トレードオフを乗り越える「良いプロジェクト」の設計

トレードオフからシナジーへ

- 現代の環境課題はあちらを立てればこちらが立たぬ、利害対立が頻発する複雑な構造をしている。
 - ・ 気候変動対策（再エネ設備） 自然保全・生態系改変
 - ・ 災害対策（コンクリート防潮堤） 砂浜や生態系の分断
- 利害が対立する問題を同時に解決し、社会・経済・環境のすべてに相乗効果（シナジー）をもたらす統合的な解決策の提示が強く期待される。

優れた研究から「良いプロジェクト」へ

- 単なるサブテーマを並べる寄せ集めは「一般課題」では採択されない。
- 必要な科学的知見を集め、技術を適切に組み合わせ、代表者が強いリーダーシップをもって、統合的に一つの環境問題解決へ向かうコンソーシアムの構築が重要

「優れた開発技術」ではなく、 「それが実際に実社会で使われるためのロードマップ」

▶ 導入・運用・維持普及主体の具 体化

「その技術は、研究が終わった後、誰が買い、誰が毎日ボタンを押して運用し、誰が保守メンテナンスを担うのか」を明確にすること。

▶ TRL（技術成熟度レベル）に基 づく道筋

研究開始時点の技術レベルと、終了時の到達マイルストーンを客観的根拠とともに策定・明記する。

- 開発する技術以外の壁（コスト、法規制、普及体制など）を、3年の研究期間で全て解決することは不可能

- 「研究期間中に対応する課題」と「研究終了後も社会実装に向けてなお残された主要課題」を正直に、明確に区分して整理すること

- 💡 誠実でリアリティのあるロードマップこそ、審査において最も高く評価される。

違いは「学術レベル」ではない。社会課題への「構想力（デザイン）」と、手続き上の「時間的余裕」

▶ 社会課題への接続不足

「研究自体は面白い、でもこれによって社会の何がどう解決されるのか？」、アウトカムが全く見えない独りよがりの記述。

▶ 評価者への配慮不足

評価者は必ずしも全く同じ分野とは限らない。常識だと思って、元の示されていない専門略語を連発する「独りよがり」は即不採択の要因に。

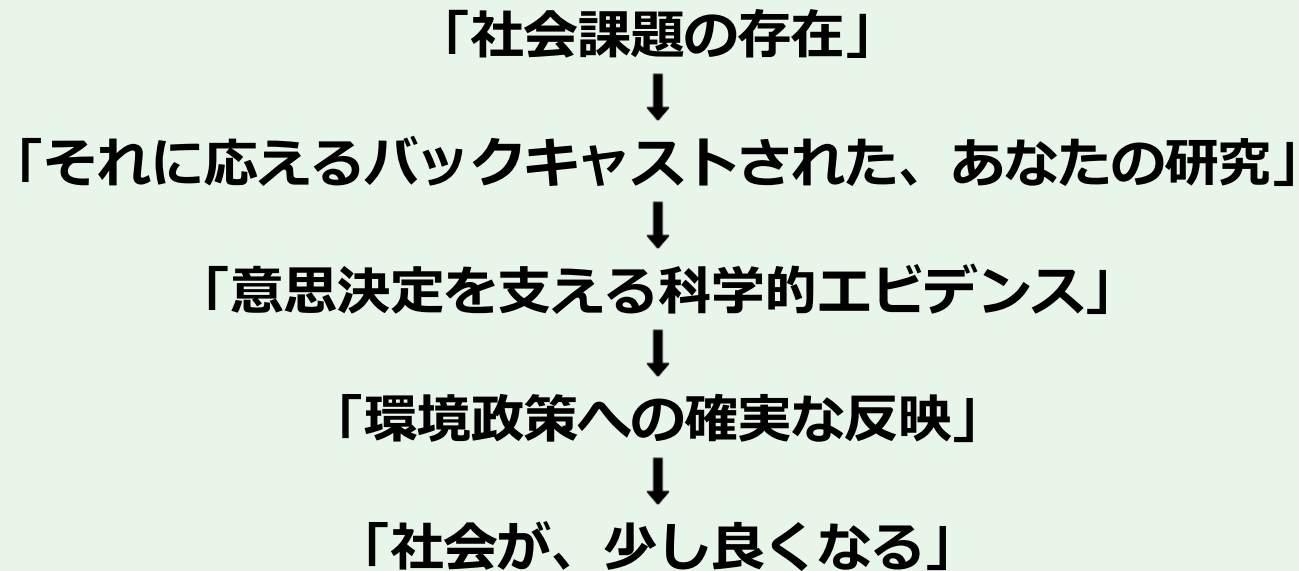
⚠ 毎年発生する「ギリギリ提出の悲劇」

- 提出後は、いかなる理由であっても軽微な修正、ファイルの差し替えは「100%不可」！
- 「編集途中の下書きファイルを誤送信してしまった」「e-Radの仕様変更等のトラブルで10時を過ぎてしまった」等により、優れた計画もプレ審査で無効になる事例が！

💡 e-Radへの情報入力には【最低でも60分】かかります。数日以上十分な余裕をもって、最終ボタンを押してください！

「私は何を研究したいのか（シーズ）」ではなく、
「私はどんな環境問題を解決したいのか（ビジョン）」

 良い研究構想が、社会を少し良くする



- 良い申請書は、最初から綺麗に書こうとして生まれるものではありません。
- 社会課題に真摯に向き合う「優れた研究構想」の結果として、自ずと立ち上がるものです。
- 皆さんの熱いビジョンと美しい構想力にあふれた挑戦を、心よりお待ちしております。